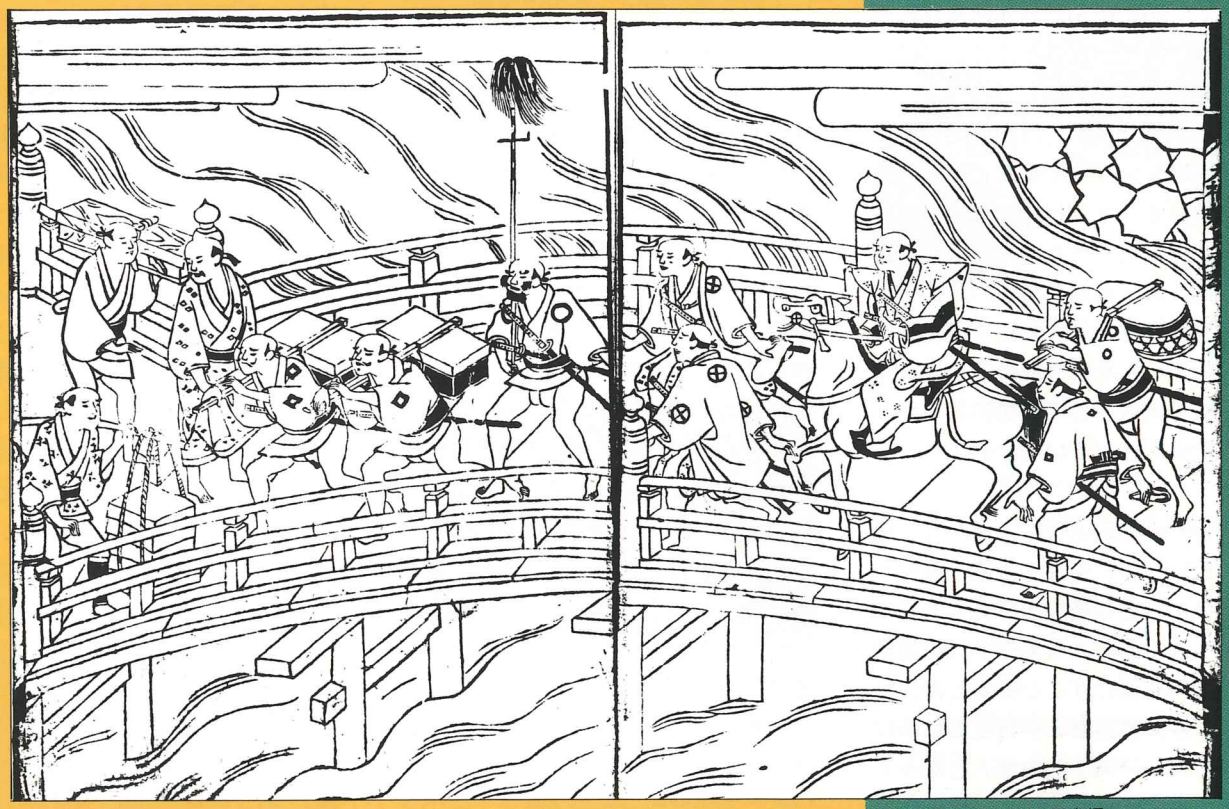
中央区文化・国際交流振興協会だより

11号
1994年10月



「日本永代蔵」挿絵 日本橋
早稲田大学図書館蔵・写真提供

▶芭蕉・西鶴と日本橋
▶平成5年度の事業報告と決算
▶市民講座　国際交流入門ー⑥
▶国際交流のつどい

中央区文化・国際交流振興協会発行
理事長　山本惠造

芭蕉・西鶴と日本橋

明治大学文学部教授　原　道生

昨平成５年は、松尾芭蕉の三百回忌の年に当っていた。そのため、日比谷の出光美術館における『芭蕉展』を始めとして、彼に因んださまざまな記念行事が催されていたことについては、まだ御記憶の方もおいでだろう。

元禄７年（1694）10月12日の夕刻、数日前に吟じた「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」を辞世の句に残して、旅先の大坂の地で死を迎えるに至った彼の最期には、孤独で厳しい旅の中にわが身を置きながら、常に「風雅の誠（純粋な詩心）」を求め続けて止まなかった漂泊の詩人としての彼の面目が、そのまま象徴されているかのようである。

ところで、そのように、進んで「旅を栖（すみか）」としつつ、東海・近畿・奥州・北陸等々と、日本各地を行脚して回った芭蕉ではあるが、その三十代以降の多くの歳月を過ごすことになった江戸の地が、生まれ故郷の伊賀上野に次いで愛着の深い「第二の故郷」となっていたということは周知の通りといってよいだろう。そして、また、その江戸における彼の本拠地が、隅田川の東岸、現在では新大橋と清洲橋との中間で東から小名木川が合流してくる地点に近い「深川の芭蕉庵」だったということも、広く一般に知られている点であるに違いない。

しかしながら、そのことに比べると、ある時期、彼が日本橋にも住んだことがあるという事実に関しては、意外に知る人が少ないのではなかろうか。しかも、その地域に彼が居を定めていたのは、最初に江戸へ出てきた折の十年間弱と、その後約十年を経た最晩年に近い頃との二度にわたってのことだったのである。

親しく近仕していた二歳年長の主君藤堂良忠（俳号蟬吟（せんぎん））の病死によって武家社会を離れることとなった芭蕉が、やがて何年かの模索の末に、住み慣れた伊賀上野から江戸へと下向してきたのは、寛文12年（1672）二十九歳の春のこととされている。もっとも、最近の研究では、それより後の延宝２年（1674）冬か翌３年早々だったのではないかとも考えられているらしい。

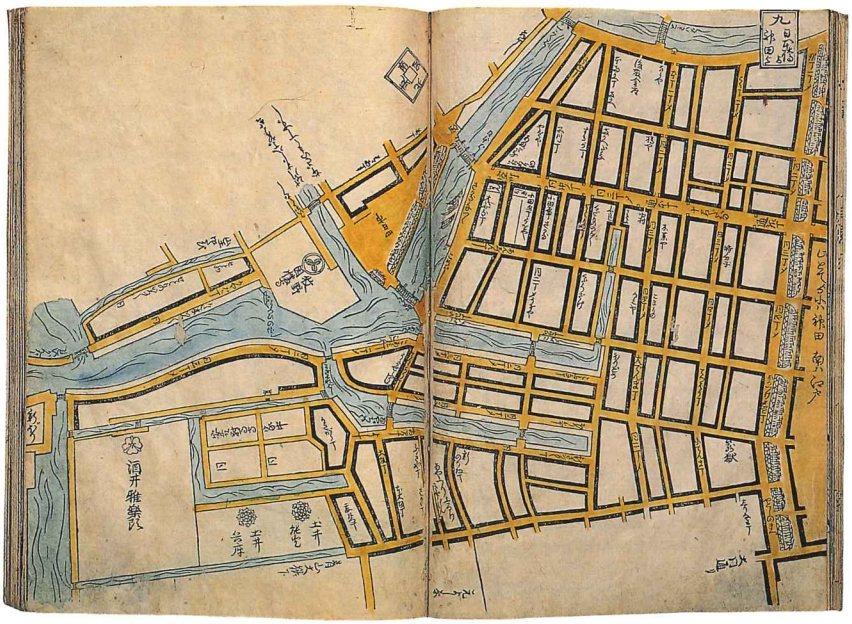
ともあれ、そのいずれにもせよ、その折の彼が、さまざまな期待を胸に抱きながらこの新興の町へと集まってきた多くの地方出の若者たちと同様に、華やかな江戸での俳諧師としての成功を夢みていたという事情は容易に想像されるに相違ない。従来の寛文12年説に従えば、故郷出立に際しての彼は、野心的な処女撰集『貝おほひ』一巻をふところに携えていたという。もちろん、江戸の書店からの出版を実現させるつもりだったのである。

しかるに、いうまでもないことだが、まだこの時点での彼は、全国的に知名度の高くなっていた後年の彼ではなかった。この時期「宗房（むねふさ）」と号していた彼は、郷里の伊賀でこそ多少は知られた存在だったかも知れないが、江戸では、ほとんど無名な地方俳人の一人というに過ぎなかったのである。そのような彼が、新しく移ってきたばかりのこの他郷で、何とか一家をなしてゆくためには、当然、物心両面にわたっての力強い支えとなってくれる好意的な庇護者が必要となってくるだろう。その時、その役割を見事に果たして芭蕉の江戸定住に力を貸した人物が、日本橋の富裕な町人で俳諧もたしなんでいた小沢卜尺（ぼくせき）と杉山杉風（さんぷう）の二人だったのである。

現在、芭蕉の伝記研究は非常に詳細な点にまで及んできているが、この江戸出府前後の時期に関しては、残念ながら、不明な点が少なくない。そうした中では、江戸へ出てきた芭蕉が、ある時期以降、日本橋小田原町にある卜尺の借家に住むようになり、また、同じ小田原町の魚問屋の杉風が親しく師事するようになったということが、一応確実なものと考えられている。

この小田原町とは、むしろ私よりも中央区の方々の方がよく御存じだと思われるが、三越本店から中央通りを隔てた室町一・二丁目辺がそれに当り、特に魚市場のある賑かな商業地であったことが知られている。従って、この頃新しく日本橋の住人となった芭蕉は、のどかな伊賀上野とは全く対照的な、繁華な江戸の市中でもとりわけ活気にみちた一画に、その生活の本拠を置くことになったといってよいだろう。

そして、その後、一方では生計のために神田上水の改修工事の書記役を務めて小石川の関口（現在文京区）に起居したりなどもしながらも、俳号を「桃青（とうせい）」と改めて俳諧の修行を積み、やがて独立した宗匠としてその名を広く知られるようになってゆくという彼の前



「江戸方角安見図」日本橋より神田まで　早稲田大学図書館蔵・写真提供

半生の経緯は、もっぱらこの地で展開されたものだったのである。

因みに、この時期の彼は、日本橋界隈を中心とする江戸の俳人たちとの交流が深く、彼らの編纂した俳書『江戸通り町』『江戸広小路』『江戸新道』の中には、「げにや月間口千金の通り町」「雨の日や世間の秋を堺町」などという彼の句が入集されている。これらの書名や句の上からは、彼らがこの町に対して抱いていた深い愛着の気持ちを如実に感じ取ることが出来るに違いない。なお、彼が当地に住んでいた時期の刊行になる『江戸方角安見図』を前頁に掲載したが、そこには「小田原丁うをや」「小田原丁さかな」と記されているのがおわかりになるだろうか。

ところで、この時、芭蕉に家を貸した卜尺は、小田原町の日本橋寄りに隣接する大舟町（後に本船町、現在室町一丁目）の名主を務めていた人物だが、自身も俳人として前記のような江戸の俳壇と繋がりを持っていたことが縁となって、芭蕉のために格別の便宜を計らうということになったものらしい。また、芭蕉が例の水道工事関係の仕事に携わるようになったのも、彼の口利きによるものではなかったかなどということも伝えられている。芭蕉と日本橋との間に深い結びつきが成立するに当っての不可欠な存在としては、まず第一に、この卜尺があげられてしかるべきだろう。

しかしながら、芭蕉の日本橋住まいにとって、むしろこの卜尺以上に大きな役割を果たしていた人物という点では、杉風の名があげられなければならない。彼の生家は、父の代からこの小田原町で、幕府・諸大名御用の鯉屋という魚問屋を営んでいた裕福な町人で、父子ともに俳諧をたしなむ風流人でもあったことが知られるが、いつの時点でか長男の杉風が、同じ町内に住む三歳年長の芭蕉の許に入門し、以後、後者が病没するまでの約二十年間を通じて、常に変わることのない誠実さをもって、師の生活を庇護し続けたものと推測されている。

中でも、この小田原町在住時の芭蕉にとって最も大きな出来事は、前述の俳諧宗匠としての独立だが、その際必要とされたはずの少なからぬ諸経費も、恐らく、鯉屋の豊かな経済力に支えられるところが大きかったのではないかと考えられている。

しかるに、念願の宗匠となってから数年を経た延宝８年（1680）三十七歳の冬、すでに新進の俳人の一人として江戸俳壇での地位も安定し始めていた芭蕉は、突如、それまでにかちえた世俗的名利の一切を捨てて、賑やかな日本橋を去り、不便な江東の深川村へと移転して、「わび」を理想とする風雅三昧の生活を志すこととなった。

このいわゆる深川隠棲の行動が、その後の蕉風確立へと連なる彼生涯の一大転機となったことは周知の通りだが、この時、新しく彼の本拠となった「深川の芭蕉庵」が、やはり杉風の提供した鯉屋の別宅であったということの上には、芭蕉と日本橋周辺の人脈との深い繋がりが、相変わらず色濃く存在しているのが認められるのではなかろうか。もし日本橋時代における杉風との出会いがなかったとしたら、後年の芭蕉の文学そのものが果たして成立し得たであろうかという疑問も、あながち無稽のものではないだろう。



「奥の細道行脚図」（許六筆）
天理大学附属天理図書館蔵・写真提供

これまでに見てきた小田原町住まいの時期を、芭蕉の第一次日本橋時代とするならば、その約十年後の元禄４年（1691）四十八歳の冬以降、この小田原町からさほど遠からぬ橘町に居を構えることとなった六ヶ月間が、その第二次に当るものだった。

この折の彼は、元禄２年春からの約五ヶ月に及ぶ『奥の細道』の旅に続けて、さらに故郷から近畿の各地にと滞在を重ねた末に、足かけ三年ぶりで江戸の地に戻ってきはしたものの、「深川の芭蕉庵」は人手に渡ったままになっていたために、翌年の５月、今度も杉風らの出資によって新しい芭蕉庵が出来るまでの半年を、止むなく、橘町の彦右衛門という者の借家に仮住まいすることになったというものである。この彦右衛門という家主については全く不明だが、この際にも、これまでと同様、何らかの形で杉風の関与があったものと考えるのが自然だろう。

ともあれ、この橘町とは、今の東日本橋三丁目から久松町の近辺に当り、先の小田原町程の賑わいはなかったにもせよ、やはり日本橋商業圏の一画を占める繁華の地域に他ならない。

この期の芭蕉が残した文章には、久しぶりに江戸へ帰ることの出来た安堵感に浸りはしながらも、一方では再び旅への思いが抑え難く湧き起こってくるという内面の葛藤にとらわれたり、また、最近の江戸の俳諧師たちの俗化ぶりに不満を抱いたりするなど、その動揺する複雑な心境が示されているのが見られるが、そのうち、元禄５年春に詠まれた「鴬や餅に糞する縁の先」の句には、後年の彼が求めた、卑俗な事柄の中にあるおかしみを平易な言葉で表現するという「かるみ」の境地がうかがわれるという点で注目しておく必要があるだろう。やがて同年５月には深川に移転することにより、以後、彼と日本橋との直接の縁は絶たれることになってしまったが、その最晩年に到達した芭蕉独自の句境というものは、すでにこの第二次日本橋時代から培われていたものだったのである。

芭蕉の他界よりも一年先立つ元禄６年（1693）の８月10日、この時代を代表するもう一人の文学者井原西鶴が、大坂でその生涯を終えている。そのため、こちらも、没後三百年ということで、一昨年から昨年にかけての間には、赤坂のサントリー美術館での『西鶴展』等々、諸種の催しがいろいろと話題を呼んでいたことを覚えておいでの方もおられるに違いない。



「西くはくをきみやげ」西鶴肖像
早稲田大学図書館蔵・写真提供

ところで、西鶴の伝記に関しては、芭蕉に比べると不明な点が非常に多く、そのうち、彼が実際に江戸に来たことがあるか否かの問題をめぐっても、現在の研究段階では、来ている可能性は十分に考えられはするものの、そのことを証明する資料も発見されていないので、来ている、来ていないのどちらとも結論を下し難いという状態になっているらしい。しかしながら、そのように、彼自身の江戸下向の事実そのものについては不確かであるにもせよ、その作品の中には江戸の地がしきりに取りあげられていることから考えれば、根っからの大坂人である彼が、活気にみちたこの新しい町のあり方に対して並々ならぬ関心を抱いていたという事情は、容易に想像がつけられるのではなからろうか。

中でも、とりわけ、さまざまな町人たちの経済生活を題材にした、いわゆる町人物の諸作において、彼は、江戸の繁栄を象徴するものとして、もっぱら日本橋にその焦点を合わせるという方法をとることが多かった。例えば、町人物の名作『世間胸算用』に見られる、「町筋（通り町の町筋）に中店（道路の中央に出す店）を出して、商ひに暇なく、銭は水の如く流れ、白銀（銀貨）は雪の如し。富士の山影（山の姿）豊かに、日本橋の人足（人々の足音）、百千万の轟くに聞きなしたり」という一文など、まさにその代表的なものといってよいだろう。また、これも町人物として名高い『日本永代蔵』中の日本橋の叙述も、それに匹敵するものと思われるので、以下、その現代語訳を紹介しておくことにしたい。

日本橋の南側の袂に夜明けから一日立ち通していると、さすが諸国の人が集まってくる場所だけに、まるで山がそのまま動いてくるかのような人の群れ。京の祇園会、大坂の天満祭に変わることがない。この毎日の繁昌も有難い御治世のおかげというもの。将軍家の広く行き渡った御政道のように広々とした通り町の幅十二間の大通りも、人々で一杯になり…

因みに、本号の表紙にはこの部分の挿絵を掲載しておいた。試みに、橋の西南隅の高札場跡あたりから眺められる現在の光景と、比べてご覧になられてはいかがだろうか。

こうした橋の近辺の賑わいに加えて、さらに西鶴は、そこに連なる日本橋の町々の様子を、それぞれの区域に縁の深い商売の店と結びつけながら、生き生きと描き出している。それらを、現存しない町名などには注を加えつつ、順序不同に列挙してゆけば、「小網町の舟問屋」「本町の呉服店」「伝馬町の絹屋・綿屋」「瀬戸物町（現在室町・本町）の青物屋」「舟町（室町）の魚市」「米河岸（本町）の米売買」「尼店（室町）の塗物問屋」「照降町（西鶴は降照とする。小舟町・小網町）の下駄・雪駄の細工人」といった工合になるだろう。そこには、折しもこの日本橋を中心とする江戸の町が、当期、新興の商業都市として多様な発展を遂げつつあるという姿が、彼の自在な筆づかいを通して、鮮やかに捉えられているのである。



奥村政信画「駿河町越後屋呉服店大浮絵」三越資料室蔵・写真提供

そして、この『日本永代蔵』には、それらの日本橋の商人たちの中で、独自の優れた才覚を働かせた結果、一日平均百五十両もの商売をするまでに成功した駿河町（現在室町一・二丁目）の呉服店三井九郎右衛門のことが、「大商人の手本なるべし」として取り上げられている。実は、この話の主人公は、富商三井家の二代目に当る八郎右衛門高平のことだが、作中、それが九郎右衛門とされているのは、作者が憚って実在の人名を避けたものだろう。また、この三井呉服店とは、屋号を越後屋と称し、その後身が今日の三越百貨店となっている。

この九郎右衛門の商売ぶりに対して、西鶴が寄せた関心の第一は、前者が、その商品の売買に際して、「万現銀売りに掛け値なし」という原則を定めていたことについてだった。なぜなら、その方法によって、この店は、当時一般に行なわれていた掛け売りによる代銀の取りはぐれや、現銀売りにした場合の客の値切りという危険を免れることが出来たからである。なお、この「現銀掛け値なし」は越後屋特有のキャッチフレーズともいうべきもので、この頁に掲載した奥村政信の絵の中にも、それを記した掛け札等を見ることが出来るだろう。

なお、その他にも、西鶴は、この店独特の新商法として、利発な手代を商品毎に一人ずつ配置した上でどんなに半端な分量でも切り売りを認めたということや、急な事情で礼服が必要になった時には大勢の職人の手で即座に仕立て上げたということなど、客への配慮の行き届いた斬新なアイディアの幾つかを興味深く書き留めている。

ところで、彼は、そのような知識を、一体どうして手に入れることが出来たのだろうか。前述の通り、目下、彼自身の江戸下向に関しては不明としかいえないかも知れないが、いずれにせよ、彼が、この町についてのかなり詳しい情報源をしっかりと持っていたということは、確実であるように思われる。

平成５年度の事業報告と決算

平成5年度事業報告

Ⅰ 文化振興事業

1 機関誌の発行

「中央区文化・国際交流振興協会だより」を発行した。

部　　数　各号　4,500部
発行回数　4回（6・9・1・3月）
配布場所　区内関係団体・協力者・区役所・特別出張所、図書館、社会教育会館等区施設

2 ランチタイム・コンサート

●名　　称　中央区ストリート・コンサート
　後　　援　日本橋プラザ株式会社
　協　　力　日本橋消防署
　月　　日　平成５年９月14日㈫
　場　　所　日本橋プラザビル南広場
　演　　奏　東京消防庁音楽隊
　演奏曲目　「カルメン」他　５曲
　聴衆者数　約500名



●名　　称　お昼のロビー・コンサート「ハープとフルートによるデュオ」
　出 演 者　山崎佑介、山崎成美
　月日・場所　10月28日㈭区役所ロビー
　10月29日㈮
　月島特別出張所ロビー
　演奏曲目　「ヴェニスの謝肉祭」他
　聴衆者数　計 約560名



3 文化講座

「国際交流からみた中央区」
月　日　５月21日・28日
　　６月４日・11日（各金曜日）
題目と講師
●「江戸のうた、アジアのうた」
　明治大学文学部教授　江波戸　昭
●「文明開化をささえた人々」
　江戸歴史研究家　川崎　房五郎
●「外国人がみた中央区」
　江戸歴史研究家　野口　孝一
●天下祭りと国際交流
　地縁社会史研究所理事　鈴木　理生
　場　所　築地社会教育会館

4 古典芸能鑑賞会

「歌舞伎を彩る音楽」
出演者　鳥羽屋里長社中・田中伝兵衛社中



内　容　●「黒みす音楽」解説と演奏
　忠臣蔵各段の音楽を実演
　●長唄「連獅子」を演奏
月　日　９月27日㈪
場　所　東京証券会館ホール
参加者　290人

Ⅱ 国際交流振興事業

1 姉妹都市親善写真展

① 中央区からサザランド市へ区の広報写真コンクールの入選作品25点を送付した。同市における10月からの全国写真展に展示された。
② サザランド市から送付された写真により「中央区・サザランド市友好写真展」を開催した。

場　所　中央区役所ロビー
　日本橋特別出張所ロビー
　月島特別出張所コミュニティールーム
期　間　平成６年２月14日～３月11日

2 国際交流推進懇談会

講　師　協会参与　吉田　健正
コーディネイター　協会参与　松浦　俊郎
月　日　７月12日㈪
場　所　区役所別館会議室
参加者　22名

3 中央区「'93国際交流のつどい」

月　日　11月20日㈯
場　所　月島社会教育会館
参加者　外国人30名、日本人40名、ボランティア43名



4 ボランティア育成のための研修会

講　師　日本バングラデッシュ協力基金副会長　中川シウリ
月　日　２月14日㈪
場　所　区役所別館会議室

5 ボランティア育成のための英会話教室

講　師　サンドラ・カーペンター
月　日　９月８日㈬～12月８日㈬12回
場　所　中央会館会議室
受講者　30名

6 文化・国際交流推進事業助成

国際交流推進事業助成　１件

7 外国客船歓迎式の実施

晴海埠頭に着岸する外国客船に対し東京都港湾振興協会と歓迎式を実施。
回　数　新入港船３隻、再入港船３隻

平成5年度収支決算

〈収入〉

科　目	決算額(円)	説　明
区補助金	37,909,000	中央区からの補助金
雑　入	285,467	預金利子収入
収入合計	38,194,467	

〈支出〉

科　目	決算額(円)	説　明
事業費	10,958,166	
文化振興費	8,860,226	文化振興事業に要する経費
国際交流振興費	2,097,940	国際交流振興事業に要する経費
管理費	18,503,147	
人件費	17,288,584	協会職員に要する経費
管理運営費	1,214,563	協会事務局の管理運営に要する経費
予備費	0	サザランド市火災見舞いのため管理費に100,000円充用
合　計	29,461,313	
区返納金	8,733,154	
支出合計	38,194,467	

市民講座

国際交流入門 — 6

桜美林大学国際学部教授
中央区文化・国際交流振興協会 参与
吉田　健正

日本人が日常口にする言葉で、欧米語に翻訳しにくいものがある。例えば、「ただいま」「いただきます」「ごちそうさま」「今後ともよろしく」「お疲れさま」「ご苦労さま」がそうだ。手紙の「ようやく秋めいてきました。ますますご健勝のことと思います」のような表現も、欧米ではまず見かけない。こうした違いは、文化や風土の違いに根ざすもので、欧米に類似の表現がないからといって、国際交流の場でこちらが使うことを遠慮する必要はない。同じように、外国人に遠慮するあまり、われわれの日常的な習慣まで曲げる必要もない。国際交流とは、そもそも異なる文化の交流なのだから、背伸びしたり、縮こまったり、相手に合わせたりばかりしては、交流の意味がなくなってしまう。


サザランド市から来た生徒のホームステイ風景

それではどうするか。「ただいま」も「いただきます」も「お疲れさま」も、誰に恥じることも、隠すこともない、立派な言葉であり、立派な習慣である。最近はすたれてきたようであるが、欧米では、食事（とくに夕食）前に祈りをささげる家庭が多い。「いただきます」は、ややそれに似ている。退社時の「お疲れさま」は単なるあいさつ代わりだから別としても、感謝、いたわり、ねぎらいを意味する表現は、もちろん欧米にもある。たとえ「お疲れさま」や「ご苦労さま」に直訳できる言葉はなくても、感情はじゅうぶん通じる。だから、外国人が一緒にいるからといって、これらの言葉を避ける必要はない。むしろ外国人にも広げるつもりで、積極的に使った方がよい。言葉の意味が分かったら、彼（彼女）たちも喜んで使うはずである。

日本流の手紙の書き出しも、いきなり用件から入ることになれている欧米人にはやや奇異に感じられる。しかし、季節感や相手への気遣いがこもっているならば、日本的な習慣を感じ取ってくれるはずである。季節に敏感なのは、日本人だけではない。相手を気遣うのも、日本人だけではない。事実、欧米でも家族や友人同士の手紙には、季節の変化や健康への気遣いに触れることが少なくない。ただし、「ますますご健勝のこととお慶び申し上げます」といった形式的なあいさつは、避けた方がよい。同じことは、形式的な贈り物についても言える。デパートから同じ商品を上司や知人に届けてもらうのは、心がこもっていないとして、あまり歓迎されない。

みんながお箸で食べているときに、外国人だからといってナイフやフォークをだすのは失礼であろう。どうしてもお箸が使えなくて困っている人や、自らナイフやフォークを要求する人は別として、お箸を渡した方がよい。ちょっとしたコツさえつかめば、お箸ぐらい、誰でも使える。欧米人だから使えないと考えるのは、偏見である。お箸をあやつる欧米人に、われわれはよく「お上手ですね」と言って賞めるが、彼（彼女）たちにとてみれば、「またか」という思いであろう。欧米人は、ナイフやフォークを使う日本人に、けっして「お上手ですね」とは言わない。

以上は言葉や習慣の問題だが、食物となると、好き嫌いや宗教などの問題がからむので、簡単にこちらの食物を押しつけるわけにはいかない場合がでてくる。本来ならば、家庭なら普段の家庭料理をだして当然だが（ゴボウもコンニャクも納豆も、味見してもらえばよい）、食べられないものがあるかどうか、できれば事前に確かめておいた方がよい。多くの人が集まるパーティのような場なら、食物も飲み物も何種類か揃えておくべきだろう。

要は、外国人にも日常のありのままの姿で接することである。自分たちの習慣だからといって、それを無理に他人に押しつけるのはもちろんよくないが、へり下る余り、それを隠す必要はない。外国人にこびる必要もない。相手の立場をおもんばかってヨソ行きの言葉を使い、ヨソ行きのつきあいをしたら、交流の意義は半減してしまうだろう。

国際交流のつどい

中央区に在住・在勤・在学する外国人の方に日本の伝統文化であるお茶、お花を紹介したりしながら、区民との交流を推進する「'94国際交流のつどい」を開催します。皆様のご参加をお待ちしています。また、外国人の方に多数参加していただきたいので、ご近所や、お知りあいの外国人の方に周知してくだされば幸いです。

開催日時　11月19日㈯午後1時～4時
場　　所　中央区立月島社会教育会館
　　中央区月島4-1-1
　　（中央区月島区民センター4階）
問合せ先　中央区文化・国際交流振興協会
　　☎03(3546)5586

秋は読書、スポーツなど心身ともにじっくり取り組むのに最適な季節ですが、今号では、歴史上、大きな足跡を残した二人の偉大な文化人、松尾芭蕉と井原西鶴と江戸のかかわりについて、原道生先生にくわしく解説していただきました。江戸文化を支えた日本橋近辺の富裕な町人の気風、当時の江戸の町の賑わいなどが生き生きと伝わってくるようです。また、当時の活況を伝える図絵なども掲載しましたので、あわせて熟読いただければ幸いです。

発行：中央区文化・国際交流振興協会
〒104 東京都中央区築地1-1-1
中央区役所２Ｆ
TEL.03-3546-5586